

## 古くて新しい証券アナリストの役割

川北 英隆 CMA

### 目 次

1. はじめに
2. 証券アナリストの業務範囲の広がり
3. アナリストに求められる統合力
4. 「対話」のプロセスとアナリスト像

### 1. はじめに

証券アナリストジャーナルの2016年10月号から17年2月号まで、「企業と証券アナリストの対話の実例シリーズ」（以下、シリーズ）を掲載してきた。そこでは、証券アナリストの活動とはどのようなものなのか、とりわけスチュワードシップ・コードやコーポレートガバナンス・コード（以下、両コード、もしくはコード）が強調している企業と投資家（そのインターフェイス役としてのアナリスト）との「対話」に重点を置きつつ、5回にわたって現実の活動を述べてもらった。

なお、対話について、本稿においてその表記を「対話」としているのは、一般的な対話のイメージと区別するため、すなわち雑談的な意味合いを

排除するためである。ここで「対話」とは、コードでいう「建設的な対話」、「目的を持った対話」を含んでいるが、それだけには限定していない。

そもそも、何をもって「対話」とするのか。その定義を最初に示すのが読者に対する礼儀だと思う。一方、現実の「対話」の場面においては、アナリストは自分自身の全人格、全能力を企業側にさらけ出すことになるだろう。

筆者としてこの現実をイメージした結果、本稿における「対話」を定義するのは、アナリスト活動とは何なのかを一通り示さないことには不可能だと判断した。言い換えると、「対話」の定義は本稿全体のテーマでもある。本稿を通して読んでいただいてはじめて、「対話」の定義らしきものが浮かび上がるだろう。これでお許し願いたい。



川北 英隆（かわきた ひでたか）

京都大学名誉教授・経営管理研究部客員教授。京都大学経済学部卒業、京都大学博士（経済学）。日本生命保険相互会社取締役財務企画部長、中央大学特任教授、同志社大学教授、京都大学大学院経営管理研究部教授を経て、2016年4月から現職。日本証券アナリスト協会・証券アナリストジャーナル編集委員長、財政制度等審議会委員、みずほ証券社外取締役、日本取引所自主規制法人外部理事などを務める。最近の著書に、『いま日本を代表する経営者が考えていること』、『京都大学で学ぶ企業経営と株式投資』、『京都企業が世界を変える』、『「市場」ではなく「企業」を買う株式投資』がある。